

石見銀山

大田市にある三瓶山の東に位置する石見銀山は、日本の歴史上最も生産量の多い銀山だった。1526 年に発見された時から 19 世紀終わりまで、石見銀山は日本の銀の大半を供給した。実際、1600 年代初期の最盛期には、この銀山で世界の銀の約 3 分の 1 が産出された。東アジア諸国の国際貿易と商業の発展はこの銀山から大きな影響を受けた。銀は 16～17 世紀において貿易に使われた主要通貨であり、石見銀山の銀でできた銀貨は品質が良いとして他の通貨よりも価値が高かった。

神谷寿貞（年代不明）という商人が日本海を航海している時に輝く山を見つけ、石見銀山が発見されたという伝説がある。その山には比較的純度の高い鉱脈と鉱床（岩のいたる所に広がった細かい鉱石の粒子）があることがわかった。

2007 年に石見銀山はユネスコ世界遺産に指定された。この銀山は歴史的・文化的に重要であるのみならず、環境に配慮されていることも認められている。銀山は一般的に広範囲の伐採を行い自然の地形を著しく破壊するが、石見銀山では森林を管理し土壌や水の汚染が最小限となるようにしたことから、環境へのダメージが比較的少なかった。この場所の保存状態も非常に良い。銀山、鉱山集落、インフラは 1920 年代に閉山した後には人の手が入らないまま放置され、その後 100 年近くほとんどの区画がそのまま残されている。